西脇順三郎コレクション　第IV巻　評論集1

全巻編集

新倉俊一

超現実主義詩論

序　5
PROFANUS　6
詩の消滅　30
ESTHÉTIQUE FORAINE　45
超自然主義　67
超自然詩の価値　95

シュルレアリスム文学論

序　109
文学運動としてのシュルレアリスム　110
一般超現実的思考　133
超現実文学理論　144
Satura の文学　146
ナタ豆の現実　153
シュルレアリスム批判　164

輪のある世界

序　172

人形の夢　176
牧人の笑い　192
檳榔子を食う者　207
輪のある世界　214
文学青年の世界　221
文学と人間の発達　241
詩の歴史　262
文学の思想的価値　265
彫刻　273
テオクリトス　277
田園の人生観　291
文学批判に於ける〈自然〉の意味　298
動物的睡眠から　303
間接な批評　309
文学へ蠟燭を立てる　313
単純な楽器の世界　319

小説 323
マリタンに関する会話 326
ゲーテと十八世紀思想 333
ヘーゲルの文学理論 336
黄色の葡萄樹 345
二人のロマン主義者 350
英国民俗の一面 359

純粋な鶯

詩の感覚性 373
詩の内容論 389
オーベルジンの偶像 397
詩人の顔色 408

純粋な鶯　423
解説（林少陽）　433
回想の西脇順三郎（阿部良雄）　445
初出一覧　449
後記　453

超現実主義詩論

IN MEMORIAM FRATRIS MEI

Plates-bandes d'amarantes jusqu'a
L'agreable palais de Jupiter.
Rimbaud.

序

本書に印刷したものは第十九世紀文学評論の一節である。

殊に Ch. Baudelaire を中心として感じたことを単に記述したものである。記述によって構成した世界は論理と体系によって支配されない単に記述によって表現せんとして企てた世界に過ぎない。

Baudelaire の Surnaturalisme に関聯して、二十世紀の Surréalisme に及んだ。けれども最近の発展変化の事状は本書に附加した滝口修造氏の論文を有益なものと信ずる。

本書中にて私の書いたものは以前「三田文学」及び「詩と詩論」に出たものであるが、それを修正して再び本書に入れた。

是等の修正と校正の全部は滝口修造氏がなした。この労力に感謝します。

著　者

PROFANUS

I

詩を論ずるは神様を論ずるに等しく危険である。詩論はみんなドグマである。Mallarmé が英吉利の学生に聞かせた講義も今では軽薄なるドグマになった。

人間の存在の現実それ自身はつまらない。この根本的な偉大なつまらなさを感ずることが詩的動機である。詩とはこのつまらない現実を一種独特の興味（不思議な快感）をもって意識さす一つの方法である。俗にこれを芸術という。

習慣は現実に対する意識力をにぶらす。伝統のために意識力が冬眠状態に入る。故に現実がつまらなくなるのである。習慣を破ることは現実を面白くすることになる。意識力が新鮮にな

るからである。併し注意すべきことは習慣伝統を破るために破るものでなく、詩的表現のために、換言すれば、詩の目的としてつまらない現実を面白くするため破るのである。実際に習慣伝統を破るならばそれは詩でない、倫理であり哲学である。人間が現実を意識する習慣上の方法は普通の感情であり、理性である。この通俗の感情、この理智を破るときは、意識力が習慣伝統より脱して現実を新鮮に意識することが出来るのである。これは俗に批評家が近代の詩は破壊のみをなし建設せぬと言って罵るところであるが、実はこの破壊は詩の建設である。この破壊がなければ詩が創造力を得ない。理智は現実を理性をもって意識するが、詩は理性を破り或は軽蔑して現実を意識するのである。

Pascal が「哲学を軽蔑するは真の哲学者である」と言っている。これは Nietzsche の哲学である。(1) 如何に偉大なる権威を有する伝統でも、伝統はこれを受くべきものでないとは彼の考えである。詩の形式も一個の伝統である。

十九世紀になってから詩の伝統が著しく亡びつゝあるは近代意識であった。Baudelaire は俗人の美に対する感覚や道徳までも軽蔑した。

コ、アの油と麝香と瀝青とで
複雑した香に熱烈に酩酊する (2)

は俗人を驚かした。今日では普通の詩人の考うるところとなった。Heine は唱歌になり、Verlaine は「Il pleure dans mon cœur」と歌ったが、これも通俗の感じ方となってしまった。

人間の感情の力はそれ自身調和する、恰も気象の如く運動する。そうして無となる、神様の存在に調和するのである。「神は、統治せんがために生存を欲しない唯一の存在である」。(3) この種の運動に二つある。或時は遠心的に動き秋の樹木の葉の如く散乱して紙屑の様にボロ〳〵になって遂に無となる。或時は求心的になり、レンズの如く太陽の光線を焦点に集め自ら燃焼するのである。前者はデカダンの詩にあり、後者は“King Lear”や Baudelaire の魂のカンシャクである。即ち emotions である。

「厳密に尚お簡単に言うと、一つの崇高なる美に対する人間の熱望であって、この詩の本質は魂の向上即ち一つの熱心と云う存在の中に表わるゝものである」。(4)a この崇高なる一つの美とは寧ろ人間の魂が完全に満足し得る境地を言うのであって、所謂 la passion の求める美とは異るものである。Vivamus, mea Lesbia !……と歌う Catullus とは違う。Baudelaire は L'amour は売徳の趣味であると言う。

「Passion はあまりに自然なるために純粋の美の世界に無礼なる不調和なる調子を導くものであり、あまりに通俗にしてあまりに乱暴なるがために詩の超自然的境地に存在する純なる希望や美なる憂欝や高尚なる失望を寧ろ軽蔑するものである」と又云っている。(4)b

「常に酔っぱらっている必要がある、そこにすべてがある、何んでもよろしい、葡萄酒でも詩

でも……」。(5)

Baudelaire は既に詩が単に思想や感情を歌う如き原始的意義を失った。これが近代詩の精神であった。

詩は原始的である。原始時代の言葉の性質は詩である。Humboldt は人間は「歌う生物」であると言った。(6) この詩の観念は言語上にて言語の起原を論ずる為に便利であるが詩に対するもっとも優れた考え方でない。Lessing の所謂“Liebhaber”である。今のオックスフォド大学の「詩学教授」である Garrod 氏は言った「この頃は詩を作ることが大変むつかしくなった、昔の長髪時代にはシャベルとすぐ詩になった。」

人生を再現するということが詩である。この説は Platon が第一、「共和国」の中で不賛成をしている。ホメロスが英雄を砂の中でカク〳〵と泣かしたことや、毛むくじゃらのオデセイが孤島の海岸にて故郷を憶いサメ〴〵泣く光景を歌ったのは、なる程人間性の表現として最初の自然主義者であるかも知れないが、そういう詩は Platon がよろこばなかった単に人生の模写である。恐らくこの Platon の説を反駁して Aristoteles が詩論を書いた。

Aristoteles は詩は単に人生の模擬でない、人間の一般不変なる性質及び傾向を表現するのであると説く。この説は人間性の模写の範囲を制限することであって、人間の「成能性」及び「必然性」に重きを置くのである。

Platon の詩に対する不満は詩には批判がないことであった。後世、「すべて偉大な詩人は必

然的に最後に批判者となる。本能にのみからるゝ詩人は気の毒に思う――」と言ったBaudelaire は Platon と共に道徳家（この日本語は安っぽいが）moralistes であった。大体に於て Aristoteles は本能主義者で後世伊太利亜のルネサァンスや下っては仏蘭西十九世紀の自然主義者と共通なところがあった。

Aristoteles は詩の起原を人間に模擬性があることゝ、模擬した作物をよろこぶ性質があることゝに帰した。この起原説は、詩の特質を説明するには余り範囲が広すぎて、他の芸術にも当てはめることが出来るだけそれだけ不明となる。詩は芸術の一部分であると説明するにすぎぬ。

十七世紀の初め Francis Bacon が The tvvoo bookes of the proficience and advancement of learning, divine and hvmane を書いて王様に献じた。この中の詩論がすこしある。実に奇妙なることはこの簡単な詩論が近代（二十世紀」の詩（dada や surréalisme）中に完全に実現されている。尤も十七世紀の（Dr. Johnson の言葉で）metaphysical 派と云う詩人達にも又 Shakespeare にも表れている思想である。

Bacon は詩人であった。詩人でなければあんなにつっこんだことが言えない。Poe が詩人のみ詩論が出来ると言ったことは実際である。Bacon 自身は詩人であった。余言であるが「Shakespeare の Bacon 説」を認めたい。論者としての Bacon は Montaigne より論理整然として詩的のところがない。然し Bacon の作品がすたれてしまったという時代は到底想像が出来ぬ。(7)

詩は imagination という心理作用に属す。この分類はエスパニア人 Huarte のなしたもので

ある。[8] この説は昔も今も認められている。併し Bacon 以前は「想像」は詩の異常的方面として認められていた。併し Bacon はこれを詩の創造力であると認めた。この点は近代の思想である。Coleridge でも Baudelaire でも Max Jacob でも認める。

「想像する」こととは idées の結合にすぎない。[9] Dr. Johnson が「metaphysical poets」を評した「出来るだけ異種の心像を乱暴に結びつけたもの」であって所謂 le bon sens とか common sense に反するものである。Shakespeare や Marvell や Donne の詩に表れている様な conceit は論理的意識を軽蔑したものである。昔の人はこれを狂気と言うのである。現代の仏蘭西の詩にある Tristan Tzara や Jean Cocteau や Ivan Goll は、この想像の術を示している。この種のメタフォルや聯想を作るテクニィクは、科学的に性質を異にするものを結びつけることである。又時間的にも空間的にも最も遠くはなれたるものを結びつけることである。常識にて到底不可能なる聯想を行うのである。Gourmont の disassociation はこの種の聯想を言う。英国の十八世紀の常人を重じた詩人（Dryden 及 Pope を中心とした）や Horatius や Boileau 等は、詩的聯想はなるべく同種の中から心像を結ぶことを俗人に教えた。

Dr. Johnson が「最も異なる種類の ideas を暴力をもって結合する」[10] と言ったことは十七世紀の詩人に対する皮肉な言葉であるが、これが実は近代の詩のテクニィクである。この暴力を十九世紀の詩人は émotion とか passion とか称して詩の創造の重要分子にした。Garrod 氏はこの種の詩的創造の気持を「聯想の暴風」と称した。[11]

聯想の哲学者であるHartleyの影響を受けたColeridgeは、「想像すること」を明かに詩の条理とした。要点は、反対の性質をもった心像が調和し平均するところに詩の創造の力が表わるゝものである。或は同が異に平均し、一般性が具体性と平均し、心像が物像と一致し、新が旧と平均し、平凡なる理性が深刻な情熱と聯結するが如きものである。その後Shelleyが、「つまらないものをまるでつまらないものでない様にするのが」詩であると言う。例えば、噴水の水が単にながれているつまらない現実をMarvellは、

噴水の流動体の鐘が
くぼんでいる貝殻の中で鳴る (12)

と歌う。

Coccteauの詩に人間のつまらない耳の存在を歌って、

オレの耳は一つの貝殻である
海の音響を愛す(13)

現今仏蘭西にsurréalismeの運動がある。この名称は包括的なもので、昔cubisteとかdada

とか称せられた連中が皆この名称に満足して統一された。自らその中にもグループが分けられている様であるが、その一派で André Breton は他の一派の Pierre Reverdy に皮肉を言っている。Reverdy の想像は a posteriori であると言う。その意味は詩の聯想は未だ同種の心像から出来ているからである。Reverdy は勿論理論として「二つの現実の関係が遠く離れればはなれる程、又それが平均すればする程、その心像の力が強くなる」と言っている。(14) Reverdy の "juste" と言う意味と Coleridge の "balance" と言うことと同じいのである。Breton は Reverdy よりは過激である。平均と言うことをあまり考えていない。その効果は実に破壊的である。

要するにこの超自然主義の詩は昔から偉大なる詩人のもっていた思想であった。別に新しい詩の形式でない。

しかしこの「想像」は詩それ自身でない。たゞ詩を作る方法である。詩の目的は詩それ自身であると Baudelaire などは言っている。又 Gautier の伝統を受けた l'art pour l'art の詩を宣伝した英吉利の Wilde などは実際そう思って死んでいってしまった。詩は芸術であるというのは、詩はそれ自身の目的を果すための一つの方法をもっているということであって、この方法を俗に芸術と言う。

詩に前述の「想像力」が大切であるということは詩が目的を達するにそれが必要なる方法であると言う意味である。

詩の目的とは何んであるか。

第一に、原始時代にては人間の思想や感情を「歌う形式」にて表現することであった。今でも素人的詩人にはこの考えがある。Aristoteles は人間の一般通有性を表していなければ詩でないという。医者が学問を「歌う形式」で書いても詩でない。恐らく Lucretius は詩人でないといわれただろう。併し Theodore de Banville は「歌うという以外にはポエジイも vers もない」と云って、即ち韻文という形式に重きを置いている。(15) 表現された材料をもって詩の正否を判断するは Aristoteles である。この伝統は今日でも詩を論ずる場合必ず問題となる。要するに原始的詩の目的は人間の考えたこと感じたことを表現することである。

第二に、Francis Bacon には近代詩人の考えと一致する点があった。自然界は人間の霊魂より比較的劣っているがために、事物の自然は人間の理智に満足を与えない多くの部分をもっている。詩の目的はこの部分に対して、人間の理智に多少の満足の影を与えることである。理智の満足の範囲が拡大される。この理由のために人間の精神の偉大さが以前よりは大になり、その善性が以前よりは正確になって、事物の自然中に以前よりは絶対な多様性を発見することが出来ると言う。又その方法は事物の光景を理智の希望通りに服従することである。是等の意味を現代語にて分解すれば、詩とは現実の人生に不満を感じ、現実の人生を以前よりは理智に満足を与える様な形体に変化せんとする人間の希望である。(8) この詩的精神は現今の surréalisme の先祖とも見做さるゝ Rimbaud によく説明されている。彼の詩は事物の存在がない、併し

単に希望ばかりある処から出て来る。[14] この詩に対する観念に比するとAristoteles の説は未だ写真術の様な気がする。Lessing の Laocoön は芸術写真の論である。

Je nähre der Schauspieler der Natur kömmt, desto empfindlicher müssen unsere Augen und Ohren beleidigt werden.

であるから少しボカしたらよいと言う論である。

Rimbaud は超現実主義の詩人達からは apôtre とか ange とか言われている。Bacon の説が今日巴里で説明されているとは実に面白い現象である。

かくの如き希望が詩である。

Bacon の「事物の外観を理智の希望に従え服従する」と言う意味は、前述の「想像する」ということゝ同意義である。即ち idées の連結をいう。詩上にて想像することは空想とか夢でなく矢張り理智の力である。

Rimbaud の詩の解説者の多くは彼の詩は無意識であるとか夢であるとか力説する。併しこれは非常なる誤解であると思う。なる程 idées の連結方法は超自然主義に於ては異状なるものであって、その形態は夢に多くみる如き無意識なるものである。然し詩は夢でない。全然有意識の心像の連結である。詩は esprit で考えることであると言われている。